

情報の受け取りで用いられる「か」と「かー」の相互行為上の働きについて

中馬隼人(名古屋大学大学院生)

1. はじめに

ある事柄についてより知識を持っている者が、相対的に知識が少ない者に対して何かを伝える行為は、情報提示(informings)と呼ばれ、それに対する情報の受け取り(information receipt)の様々な方法について、主に会話分析の観点から研究が行われている(Heritage, 1984; Maynard, 2003; Thompson, Fox & Couper-Kuhlen, 2015; Yokomori, Yasui & Hajikano, 2018 など). 例えば, Heritage(1984)は、情報提示の後の受け取りの位置や、質問によって引き出された情報提示の後の受け取りの位置で、“oh”を用いることで、先行する情報提示が価値のあるものであり、自らの認識が変化したことを表示することを示した。また、Yokomori, Yasui & Hajikano(2018)は、日本語の情報の受け取りの方法である「あ+相手の発話の繰り返し」と「あ+相手の発話の繰り返し+ね」について分析し、前者は先行する情報提示が情報価値のあることを示し、後者は情報価値がないものとして情報提示を受け取るものであると述べた。

本発表は、日本語会話で用いられる情報の受け取りの方法の一つである、「情報提示の一部の繰り返し」+終助詞「か」で構成される応答発話を対象とする。終助詞「か」の機能については、森山(1992: 41-42)が「他者からの情報伝達は、新情報であるがゆえ、それに対する断定の留保を行う」と述べているが、「か」を用いた情報の受け取りが、実際の相互行為の場面で参与者たちが何をするために用いられているかは明らかになっていない。

本発表では、「情報提示の一部の繰り返し+か」という発話形式を用いて情報の受け取りをすることにより、自らが持っていた想定を修正したことを表示することを示す。加えて、「か」のプロソディが異なる「かー」を用いた情報の受け取りが、相互行為上どのような働きを持つのかについても着目する。さらに、「か」を用いた情報の受け取りが、相互行為の資源として働きうるということについても検討したい。

2. データと方法論

本研究に使用したデータは以下の通り：(i)筆者が収録した日常会話のビデオデータ (4 時間)、(ii)Callfriend および Callhome Japanese コーパスの電話会話の音声データ (12 時間)、(iii)Sakura コーパスのビデオデータ (2 時間)²。(i)~(iii)の合計 18 時間のデータから、情報の受け取りに「か」が用いられているものを抽出し、その中から「情報提示の一部の繰り返し+か」の事例 18 例、「情報提示の一部の繰り返し+かー」の事例 6 例を考察対象とした。分析については、会話分析の手法を用いる。ちなみに、トランスクリプト上で、「->」と「=>」という記号を用いるが、前者は情報提示、後者は情報の受け取りを示すものである。書き起こし記号は、基本的に Jefferson(2004)に基づいている。

3. 分析

3.1 「情報提示の一部の繰り返し+か」

まずは、先行発話である情報提示の一部を繰り返し、終助詞「か」を用いて情報の受け取りをする事例について見る。

断片(1) [snackparty] ((30 代男性 2 名による日常会話。リュウタが、以前勤めていた工事現場での仕事についてタカシに話しており、それについてタカシが質問する。))

01	タカシ		なかなか大変だよな:::(.) 工事現場って建築関係だったの?
02	リュウタ	->	んー うち土木。
03	タカシ	=>	土木か.=

¹ 本稿において、終助詞「か」の母音部分が引き延ばされ、なおかつ下降調で産出されるものを便宜上「かー」と表記する(トランスクリプト上では、「か:..」のような表記になる)。

² (ii)と(iii)については、Talkbank(MacWhinney, 2007)にてアクセス可能である。

01 行目のタカシの極性疑問文「工場現場って建築関係だったの?」は、リュウタが建築関係の仕事に就いていたということを前提とした形式の質問である(ただし、タカシはそれについての知識が今は不確かであることを「っけ」を用いて示し(Hayashi, 2012), リュウタに質問している)。しかし、02 行目で、リュウタが建築ではなく、土木関係の仕事に就いていたという情報を提示する。03 行目で、タカシは、リュウタによる情報提示の一部(「土木」)を繰り返し、それを受け取っている。このとき、終助詞「か」を用いることにより、自らが持っていた「リュウタは、建築関係の仕事に就いていた」という想定を修正し、認識を新たにしていることが理解可能である。

次も、「情報提示の一部の繰り返し+か」の発話形式の情報の受け取りの例である。

断片(2) [callhome1713] ((アメリカ在住の男性 A と日本在住の男性 B による電話会話。断片の直前では、A が以前の恋人である女性に手紙を出したことを B に伝えている。それに対してどんな返事があったのかを 01 行目で B が質問している。))

01 B んで:: (1.0) hh どうだった?
 02 (0.4)
 03 A -> え? (.) あの:: まだ出したばかりだよ.
 04 (0.4)
 05 B => >まだ出したばかり [か.<
 06 A [まだ日本に: 行ってないでしょ.
 07 (0.7)
 08 B ああ::.

01 行目の B による疑問詞疑問文「どうだった?」に対して、03 行目で A が「まだ出したばかりだよ」という応答をすることで、女性からの返信はまだ来ていないという情報を提示している。B は 05 行目で、03 行目の A の発話の一部(「まだ出したばかり」)を繰り返し、「か」を用いて情報の受け取りを行っている。

このやりとりから理解可能であることが 2 点ある。まず 01 行目の B の発話の組み立てから、B は、A がすでに女性から返事もらったと想定しているということ。もう 1 つは、その B の想定が、A にとっては予想外であったということが、03 行目の「え?」の使用から分かる(Hayashi, 2009)。これらの観察から、B の想定が間違っていたことが、A による情報提示により認識可能となり、B が自分の想定を修正し、A の情報提示を受け取っていると記述できる。

この二つの断片から示した「情報提示の一部の繰り返し+か」という形式による情報の受け取りと、終助詞「か」が無い形式の「情報提示の一部の繰り返し」による情報の受け取りとを比較してみると、より多くのことが分かる。

断片(3) [Sakura07] ((女子大学生 4 名による日常会話。話題は最近放送されたドラマの話である。B が自身の好きな俳優が出演していたドラマを誰か見ていないか尋ねると、C と D は観ていないことが分かった。しかし、A はそのドラマの一部をたまたま観ており、自分が観たシーンについての説明を 01 行目で行っている。))

01 A なんか:: あれよく分かんないけどワイン::>なんか<飲んで泣いてた。
 02 (0.9)
 03 A hh [hh
 04 B [泣いてた泣い [てた=うんうんうん=そうそう] そう。
 05 A [ところ:: し か 見 て ない.]
 06 D メイちゃん [は-
 07 A [あれなんなの? (.) あれなんのドラマ?
 08 (1.3)
 09 A どうゆう [話な-
 010 B -> [ワインのドラマ。
 011 A => ワインのド [ラマ ((領き))
 012 B [うん
 013 (1.1)
 014 B すごい面白い。

07 行目で A は、話題となっているドラマを全て観た B に対してそれがどんなドラマなのかを質問し、情報を求める。B は、10 行目で「ワインのドラマ」という情報提示をし、A が 11 行目で B の発話を繰り返す形で情報の受け取りを行う。

このやりとりから理解できることは、A は 01 行目で、たまたま観たドラマのワンシーンにワインが出てきたことを報告しているのだから、10 行目の B による情報提示は、A にとって新しいものでもなく、B が持っていたドラマについての断片的な知識と異なるものでもないということである。よって、11 行目の A による情報の受け取りは、相手が提示した情報をシンプルに受け取っているものとして理解可能である。

ここまで提示してきた三つのデータを検討すると、断片(1)(2)と、断片(3)との間に大きな相違点が観察可能となる。つ

まり、「か」を用いた情報の受け取りは、情報を受け取った参加者の知識や想定が修正されるのに対し、「か」を用いない情報の受け取りではそのようなことがなされず、シンプルに情報を受け取っているだけだということである。

3.2 「情報提示の一部の繰り返し+かー」

次の断片は、情報提示があった後、その一部を繰り返し、終助詞「か」を用いるという点では3.1のデータ（断片(1)と(2)）と同じである。しかし、「か」の母音部分(a)が引き伸ばされ、なおかつ下降調で産出されるという点が異なる。森山(2008)によると、相手の発話の一部を繰り返し「エコー表現」に「ね」が付加すると、伝達の了解だけを表す。一方で、「ねえ」のように長く、下げる発音だと、相手の発話を受け取り、何らかのコメントをする段階で思考に時間がかかっていることを表示するという。同様に、「か」を用いた情報の受け取りについても、プロソディが異なれば、異なる働きがあることが観察できる。

断片(4) [プロポーズ] ((30代男性3名による日常会話。ギリシャで彼女にプロポーズをする予定であるマサキに対して、タカシが冗談で現地へお祝いに行くと話しており、具体的な日程を尋ねている))

01	タカシ	ゴー	ゴールデンウイーク?
02		(0.4)	
03	マサキ	->	ゴールデンウイーク=27から.
04	タカシ	=>	<u>27から</u> (0.3) >ちよっと待ってよ< (0.6)
05		=>	.hhh <にじゅう>ななからか:~:~: (1.1) 俺が休みになるの::~30からだでな::~.

05行目でタカシが、03行目のマサキによる情報提示の一部を繰り返し、さらに終助詞「か」の音を引き伸ばし、下降調で産出することで、情報の受け取りを行っている³。このとき、情報の受け取りだけでなく、これからしようと考えていたこと（ギリシャにマサキのお祝いへ行くこと）が困難であることの表明を投射しているように聞こえる。実際に、1.1秒の間の後、06行目では、タカシが30日から始まる自分の休みの日程を説明することで、27日からギリシャには行けないことを間接的に示していることから、そのように考えることは合理的である。

このように、「情報提示の一部の繰り返し+か」の「か」の音が伸ばされ、下降調で産出されるときには、自らの想定が修正されたことを示すだけでなく、その情報を受け取ることによって生じる何らかの行為の可能性を投射することができると考えられる。

3.3 「情報提示の一部の繰り返し+か」が相互行為の資源として用いられるとき

最後に、情報の受け取りに「か」を用いることが、相互行為の資源として利用されることについて検討したい。次の断片は、断片(2)の数分後の会話の一部である。

断片(5) [callhome1713]

01	A	>そういえば< 明日俺誕生日なんだよ.
02		(0.7)
03	B	hhhh
04	A	25歳の.
05		(1.2)
06	B	10月にじゅう::(>なんだった<は-) (0.3) ()はち?
07		(0.7)
08	A	え?
09		(0.5)
010	B	じゅ[うが]つにじゅ↑う?
011	A	[いつ?
012	->	にじゅうしち.
013	B	=> しちか.
014	A	ああ. (0.4) あだまだこっち26だからな.

01行目で、Aが明日は自分の誕生日であることをBに伝え、断片の直前とは断絶したトピックを導入している。06, 10

³ 05行目の情報の受け取りは、2回目であると考えられる。というのも、04行目のタカシによる「27から」は、他者修復開始の形式を用いた驚きを伴う情報の受け取りであると考えられ (Thompson, Fox & Couper-Kuhlen, 2015 など)、この1回目の情報の受け取りを「>ちよっと待ってよ<」によってキャンセルし、やり直しをしていると考えられる..

行目で B が、A の誕生日が何月何日であるかを質問している。これら 2 つの質問形式から理解可能であることは、B は、A の誕生日が 10 月 20-29 日のうち、いつであるかの知識が不確かであるということである。ここで重要なことは、A がアメリカに在住、B が日本に在住しているという事実である。アメリカと日本には、十数時間の時差があるため、A が「明日」と言った場合、それが何月何日になるのかを同定することに少し困難が生じる可能性がある。B は 06 行目の質問では、「28 日」と言おうとしていることが、発話から推測できる。しかし、B の発話に言い淀みが生じて、聞き取りにくかったため、08 行目で A が他者修復を開始している（「え?」）。それにより、B は自らの発話の間違いの可能性（または、正しい答えを提示しているという自信が無いこと）に指向し、06 行目で示した「A の誕生日が 10 月 28 日である」という想定をキャンセルし、10 行目で「じゅうがつにじゅう↑?」と、二十以降の数字を A に委ねている。その後、12 行目で A は自分の誕生日が 10 月 27 日であるという情報提示を行う（「27」）。13 行目で B は、その情報の受け取りを「か」を用いて行い、自らの想定を修正したことを示している。

ここで重要なことは、B が一旦持っていた想定を放棄し、A に答えの提示を委ねたという点である（06→10 行目）。言い換えると、B はアメリカと日本の時差から来る、日時を同定することを困難だと感じ、それを解決することを放棄したということである。しかし、B の「しちか」という情報の受け入れの組み立てから、「10 月 27 日」という情報において、20 の部分は理解していた、ということを B が主張していることが分かる。つまり、B は日時の同定という活動を完全に放棄したわけではなく、部分的には従事し続けていたことを主張していると考えられる。

これらをまとめると、「か」を用いて、相手の情報提示によって自らの認識が修正されたことを示す（「27」における「7」の部分）が、情報提示のどの部分を繰り返すかによって、情報の受け取りを行う参加者が元々部分的には理解していた（「にじゅう」の部分）ことを主張することができるということである。つまり、この発話形式による情報の受け取りを戦略的に用いることにより、認識的権威(Heritage, 2002)を、微細なレベルで表示することができると考えられる。

4. おわりに

本発表では、日本語会話の情報の受け取りの発話形式の一つである、「情報提示の一部の繰り返し+か」が相互行為上どのように用いられているのかを示した。今後の課題としては、「か」が用いられる他の連鎖環境についても分析を進めていくことや、情報の受け取りに用いられる他の発話形式との比較を行うことが挙げられる。

参考文献

- Hayashi, M. (2009). Marking a 'noticing of departure' in talk: eh-prefaced turns in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics*, **41**, 2100-2129.
- Hayashi, M. (2012). "Claiming uncertainty in recollection: a study of kke-marked utterances in Japanese interaction." *Discourse Processes*, **49**, 391-425.
- Heritage, J. (1984). A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In Atkinson, J.M., & Heritage, J. (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press, 299-345.
- Heritage, J. (2002). Oh-prefaced responses to assessments: a method of modifying agreement/disagreement. In Ford, C. E., Fox, B. A. & Thompson, S. A. (Eds.), *The Language of Turn and Sequence*, Oxford: Oxford University Press, p. 196-224
- Jefferson, G. (2004). Glossary of transcript symbols with an introduction. In: Lerner, G. H. (Ed.), *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*. John Benjamins: Amsterdam & Philadelphia, pp. 13-23.
- MacWhinney, B. (2007). The TalkBank Project. In J. C. Beal, P. Corrigan. & H. L. Moisl (Eds.), *Creating and Digitizing Language Corpora, volume 1, Synchronic Databases*, 163-180. Houndmills: Palgrave Macmillan.
- Maynard, D. W. (2003). *Bad News, Good News: Conversational Order in Everyday Talk and Clinical Settings*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 森山卓郎 (1992). 疑問型情報受容文をめぐって 語文, 35-44.
- 森山卓郎. (2008). 談話におけるエコー表現—相手発話を受ける「ね」「ねえ」「か」を中心に— 「単位」としての文と発話 ひつじ書房 pp.27-44.
- Thompson, S. A., Fox, B. A. & Couper-Kuhlen, E. (2015). *Grammar in Everyday Talk: Building Responsive Actions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yokomori, D., Yasui, E. & Hajikano, A. (2018). Registering the receipt of information with a modulated stance: A study of ne-marked other-repetitions in Japanese talk-in-interaction. *Journal of Pragmatics*, **123**, 167-191.